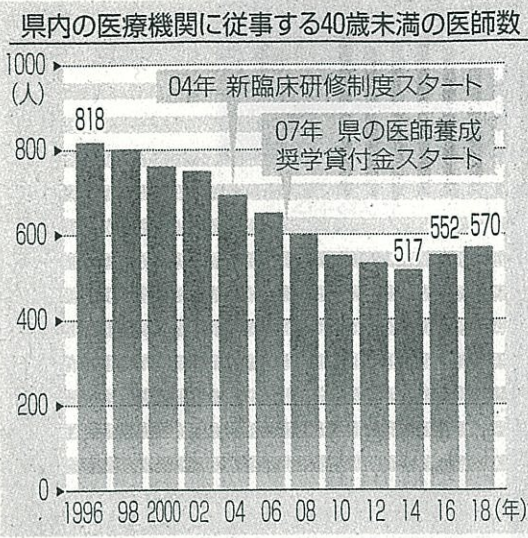


# 若手医師 県内増加

医師不足に苦しんできた本県で近年、若手医師が増加している。40歳未満の医師数は2014年調査の571人を底に、16年は552人、18年は570人と回復。県の奨学金を受給した医師が増えたことが大きな要因で、今後も増える見込みという。しかし、高知市、南国市以外の地域では医師不足が続いており、県は「医師の偏在解消にはあと10年かかる」としている。

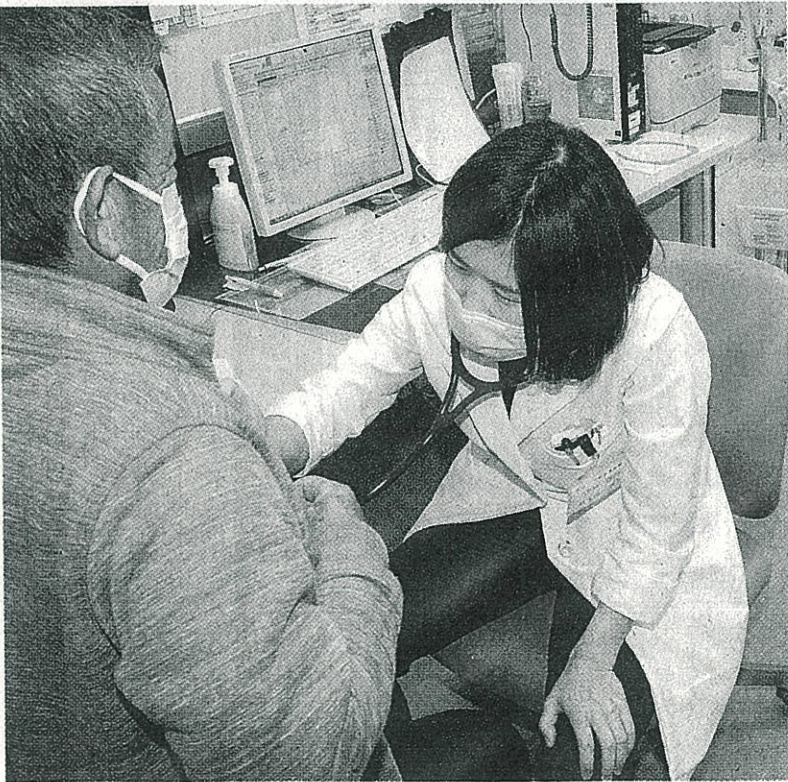
全国の医師数は2年ご 新臨床研修制度で医師不足に厚生労働省が発表。足はさらに加速した。研本県の40歳未満の医師数 修医が地方の大学ではなは、記録のある1996 くと、都市部の病院を希望年の818人から減り続けて するようになり、県全体きた「グラフ」参照。 で40人台だった研修医採用数は06年に36人に減



## 奨学金受給者が地域へ

### 偏在解消には「あと10年」

少。高知大学は前年の16 働く意思のある学生に对人から7人に減り、危機 しい、月額15万円を貸与。卒業後には県内の指定医療機 業後に県内の指定医療機 内科医、富士田崇子さんこの「高知大ショック」 関で貸与期間の1.5倍 (31)は「急性期から慢性を受けた県は07年、医師 (6年貸与の場合は9年) 期まで、地域で幅広く診養成奨学金貸付金制度を創 勤務すれば全額免除する ことができる医師にな設した。卒業後に県内こ ことで、若手医師が定着 りたい」と話す。



高知大を卒業し、土佐市民病院で働く医師の富士田崇子さん。住民の暮らしを支えている(土佐市高岡町甲)

若手医師の増加について、奨学金創設当時から医師確保に取り組んできた県医療政策課の川内敦文課長(医師)は「だいたい想定通り」と分析。医師のキャリア形成支援などの取り組みも効果を上げ、研修医の採用数は14年以降、50、60人台で推移している。

一方で2000年代の若手医師不足は「30代半ばから40代の中堅医師不足」に変わって継続している。診療と後進の育成を担うこの世代の穴は大きく、特に郡部で中核となる病院では医師不足解消に至っていない。

「奨学金受給者が中堅医師として活躍する頃には、これまでの医師確保策の効果が県内全体に行き渡るだろう」と川内課長。「これまでまいてきた種がつぼみとして膨らんできた。花が咲くまで、この10年が頑張りのころ」と話している。

◇ (門田朋三)

富士田さんら県内で地域医療に携わる若手医師を5日から「うちワイド面」で紹介します。